

シュモラーとヴェーバーにおける社会科学・経済学の方法

——ヘーゲルとマルクスからみた差異——

角 田 修 一

はじめに

1. シュモラーにおける経済学の方法
2. 行為の理論とポスト・マルクスとしてのヴェーバーの方法
3. 21世紀社会科学の課題—関係・制度・行為の関連性

はじめに

21世紀における社会科学と経済学の課題は、人間の社会・経済関係と社会・経済制度そして社会・経済的行為、この3つのあいだの相互関連を明らかにすることにある。その際、社会科学と経済学の方法における主要な論点である論理と歴史、個別・特殊・普遍、概念と実在、理論と実践的理念、社会の有機体論的把握と原子論的把握、といった諸問題について何らかの立場を明確にする必要がある。

前稿「マルクスとメンガーにおける方法の差異」(角田 [2008b])は、オーストリア学派の創始者であるメンガー (Carl Menger, 1840-1921) のドイツ歴史学派に対する方法論批判を主要な4つの点に絞り、マルクス (Karl Marx, 1818-1883) がこれを受けとめることができたとすれば、どのようにこれに答えたであろうかという課題を設定した。そして、20世紀に入って発見、公表された草稿を含めて、マルクスの社会科学と経済学の方法の内容を明らかにした。

本稿はその続編として、メンガーによって批判の対象とされたドイツ(新)歴史学派の中心人物シュモラー (Gustav von Schmoller, 1838-1917) の経済学方法論を検討する。そして、このメンガーによる批判と問題提起を積極的に受けとめ、シュモラーに代表されるドイツ(新)歴史学派の方法論を内部から批判したヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) の社会科学と経済学の方法論を検討する。これによって、マルクス、メンガー、シュモラー、ヴェーバーという、いわばヘーゲル以後の、世代を異にする四者の社会科学・経済学方法論を比較方法論的にとりあげることになる。また、20世紀社会科学(および経済学)における最大の源流であるマルクスとヴェーバーに遡って、社会科学と経済学の方法の主要な課題を明らかにすることにもつながる。これが本稿の課題である。¹⁾

1. シュモラーにおける経済学の方法

メンガーの挑戦的な批判論文「社会科学，とくに政治（＝社会）経済学の方法についての研究」（Menger [1883]）は，詳細な論述を特徴とする，あくまで理論的な態度に徹したものであった。これに対して，当時，ドイツ（新）歴史学派およびドイツ社会政策学会の指導的位置にあったシュモラーは，メンガーの論文をデイルタイの著作と並べて批評（1883年）し，いわばこの批判を軽くいなした形になった。

しかし，シュモラーは，その10年後の1893年に，『国家科学辞典』初版第6巻において，経済学の方法に関する論稿を発表している。この大規模な辞典に書かれた長い論稿は，「国民経済の概念と国民経済学の方法論の諸問題を結びつけ，この観点から，国民経済の現象と理論の本質をいっそう精密に究明しようとする」（初版の冒頭の一節より）ものであった。その後，同論文は大幅に加筆され，同辞典第3版第8巻（1911年）に収録された。「国民経済，国民経済学および方法」（Schmoller [1911]）がそれである²⁾。

ドイツ歴史学派およびシュモラーそれ自体の研究については，わが国の経済学史あるいは経済思想史研究の成果を参照することができる³⁾。ただ，本稿は，メンガーとマルクスにおける経済学の方法論に対し，ドイツ（新）歴史学派の代表者であるシュモラーがどのような方法を提示し，また「歴史学派を出自とする子」（1904年）と自認するマックス・ヴェーバーがどのようにこれらを受けとめたかということに課題を限定する。

このような経済学方法論における理論的系譜と配置関係の見取り図をあらかじめ提示するならば，およそつぎのようになる。

ドイツ歴史学派の経済学には，民族精神の文化的所産として国民経済を考え，そこに先進国イギリスとは異なるドイツ国民経済の特殊歴史性を見出そうとする傾向がある。これは明らかにドイツ観念論の流れを汲むものである。ドイツ観念論哲学は，カント哲学を批判的に継承し，弁証法を集大成したヘーゲルの哲学において1つの完成をみたことはよく知られているが，ヘーゲル哲学がその究極において到達した点は，「絶対理念」が世界を生み出すというものであった。この「絶対理念」は「理論的理念」すなわち「真の理念」と，「実践的理念」すなわち「善の理念」，この両者の統一であった。マルクスは，ヘーゲルの絶対理念には組みせず，これは世界を逆立ちさせたものとみたが，経済学の方法としてはヘーゲルの理論的理念すなわち概念把握の方法を継承し，これを分析的方法を基礎あるいは前提するものにして直し，自身の方法を「理論的方法」と称した。これに対し，ドイツ歴史学派は，主としてカントに由来するが，カントが歴史科学を否定したことに対して，新カント派の文化科学あるいは精神科学の哲学に依拠している。これはヘーゲル哲学において実践的精神（「意志」）が客観的世界を創造する（「法の哲学」）とされた側面を継承したものといえる。こうしたヘーゲルの流れを汲む方法に真っ向から反対し，個別具体的なものと抽象的普遍的なものとを峻別し，歴史と論理とを区別し，理論的科学と歴史的科学そして政策科学とを分離したのがメンガーであり，彼を創始者とするオーストリア学派の経済学であった。そして，ヴェーバーは，これらを受けた形で，ドイツ歴史学派の経済学の伝統が実践的観

点からする価値判断を主たる目的とする倫理的科学であり、それを基礎とする実証的・統計的科学であるために、ヘーゲル哲学が提起した概念と実在の関係を明確にできなかったことを批判した（「ロッシャーとクニース」1903-1906年）。ヘーゲル流に言えば実践的理念と理論的理念、この2つのあいだに実践的理念の側から橋を架けるための理論的手段として考案されたものがヴェーバーの「理想型」である。

1883年のメンガーによる歴史学派への方法論批判に応えた論文が、シュモラーの1893年の最初の論稿である。そして、これに対するヴェーバーの答えが「客観性」論文（1904年）であるとすれば、再度、これに答える形で大幅に改訂されたシュモラーの論稿が1911年のものであった。これは社会政策学会（1872年結成）における「価値判断論争」（1909年-）をふまえて書かれたものである。そして、ヴェーバーによる「社会学と経済学の『価値自由』の意味」と題する、これまた有名な論文は、方法論としての内容は1904年の「客観性」論文と基本的な違いはないが、シュモラーの1911年の論文に対する学会の内部討議のために1913年に書かれたものであり、1917/18年という激動期に公表されている。

以上が、ドイツ（オーストリア）における社会科学と経済学の方法をめぐる19世紀末から20世紀初頭にかけての経緯と理論的系譜そしてその配置である。最初に、シュモラーにおける経済学方法論を検討することにしよう。

(1) 観念的なものとしての国民経済

シュモラーの経済学において、まず何よりも「国民経済」は「観念」によって成り立っているものである。この「観念」は、その他の文化目的や、国家、教会、社会領域、道徳・慣習・法の担い手と同じ心的「力」による。また、国民経済をその他の社会領域と分離しているのもこの「観念」である（[1911] S. 222, 訳12）。したがって、まず「国民」それ自体が1つの観念的存在である。国民経済の現象は、「同一の、または類似の心的力に支配されている」（S. 225, 訳15）。その力とは、国民のもとで「意志の統一を作り出す大きな精神的領域である」（S. 220, 訳10）。

したがって、国民という言葉は、「構成員を統合する観念の総体」として、また、「人間のあらゆる種類の内面的な、心的・道徳的な結合（innere psychische-moralische Verbindung）を示す代表者として用いられる」（S. 219, 訳9）。

このように、シュモラーは、経済学の対象が人間の意識や観念から独立した実在であることを否定するところから出発している。この方法的立場は、ヘーゲル＝マルクスの理論的方法から見れば、これとまったく異なる主観的観念論である。

シュモラーは、経済を、多数の人間が、労働、交換によってつくりだす諸活動や諸関係の全体（der Inbegriff）あるいはまとまった領域（geschlossener Kreis）であると定義する（S. 218, 訳7）。「国民経済」の定義については、「国家の中に存在し、互いに並存したり、上下関係にあったり、依存関係にある個別経済および団体経済（Korporationswirtschaft）の1つの統一的全体（ein einheitliche Inbegriff）」（S. 221, 訳11）ということになる。「国民経済は、人間による自然形成の一部であると同時に、感情を持ち、思考し、行動する組織された社会による文化形成（Kulturgestaltung）の一部でもある」（S. 225-6, 訳16）。あるいは、「経済的文化の世界…が成立するのは、何よりもまず人間の精神的力によってであり、その力は、最初は感情や衝動、観念や目的として、次に行動

および意志の習慣的方向として、最後には人間的・社会的・国家的制度（Institutionen）として現われる」（S. 311, 訳121）。

これがシュモラーによる国民経済のとらえ方である。ここにはドイツ観念論の影響が濃厚にみられる。シュモラーは、自然科学と精神科学・文化科学とは方法が異なるとするディルタイ（1833-1911, 生の哲学の代表者）、ヴィンデルバント（1848-1915, 新カント派, ドイツ西南学派の創始者）、リッカート（1863-1936, 新カント派, ヴィンデルバントを継承）らの主張に大筋において依拠する。これらは、ある意味で、ヘーゲル「精神哲学」における客観的世界（法, 道徳性, 人倫=家族・市民社会・国家）の内容を主観的精神世界に引き戻したものである。したがって、ヘーゲルの社会哲学がもっていた客観的実在性すなわち必然性の内容（それがマルクスの市民社会批判に継承された）を消し去っている。これは明らかに、ヘーゲルの「理性的自由の哲学」（角田〔2008a〕87ページ）からみるとカントへの後退であり、共同体あるいはそれを貫く必然性としての普遍性や実在性を否定するものである。⁴⁾

シュモラーは、国民経済を有機体とよぶかどうかは副次的な問題であって、それはいわば人体の比喩であり、直感的な理解にとどまる、としている（S. 223, 訳12-13）。

さらに付言しておく、シュモラーは、エコノミックスという概念は国家と切り離された経済を社会経済というのと同様に、「経済をたんなる財のプロセスとして描くことにより、行為する人間, 社会, 経済過程の社会的側面をいわば排除しようとするもの」であり、「それはリカードへの復帰である」（S. 222, 訳12）と述べている。これはシュモラーによる新古典派経済学批判であるが、後に紹介するように、シュモラーの真意はその心理学的根拠の不十分さの指摘にある。

（2）国民経済学（die Volkswirtschaftslehre）の定義と体系および価値判断について

シュモラーのいう国民経済学は、国民経済が正しく定義されるという前提のうえで、「国民経済的現象を記述, 定義し, 原因から説明し, 相互連関を持った全体として把握しようとする科学」（S. 224-5, 訳15）というものである。「この科学の中心にあるのは, 分業, 労働組織, 取引, 所得分配, 社会的な経済制度（die Einrichtungen）といった, 今日の文化民族のなかで繰り返し生起する類型的現象である」（S. 225, 訳15）。

シュモラーによれば、「国民経済学は, 最初から, 倫理的・歴史的価値判断による理想の設定（vermäge sittlich-historischer Werturteile zur Aufstellung von Idealen）を行ない, この点にこそ活動の主要な目的があるとみなしてきたし, この実践的機能のある程度まで保持してきた。国民経済学は理論とともにつねに生（生活 Leben）のための実践的教説を提出してきたのである」（S. 225, 訳15）。したがって、ドイツでは「歴史学派が国民経済学の倫理的性格を強調し」（S. 311, 訳121）、あらゆる人間生活において「倫理的価値判断（sittliche Werturteile）が重要な役割を果たし, あらゆる原因のかなりの部分を占めている」（S. 311 訳122）ことを明らかにした。

ところで、国民経済学は自然科学と精神科学（心理学, 倫理学, 国家学, 法学, 社会学など）との中間（S. 225, 訳16）にある。経済学の体系としては、ラウ（Rau, Karl Heinrich）が官房学を財政学, 行政学, 国民経済学（抽象的純粋経済理論, 実践的应用科学としての経済学）の3部門に分けたとされている（『岩波経済学辞典第3版』「カメラリズム」木村元一稿, 1992年, 175ページ）。これに対して、シュモラーの考えは、国民経済学の体系を「一般国民経済学と特殊国民経済学」とに区分すると

いうものであった。

シュモラーの考えによれば、「一般国民経済学は抽象的・平均的な国民経済を描写したり、国民経済的知識を理論的に基礎づけて総括するのに対して、特殊国民経済学は特定の時代を叙述したり、あるいはむしろ特定の国民、諸国民の集団をその経済的側面から具体的・個別的に論述する」（S. 226, 訳17）ものである。ここにみられるように、シュモラーにおける普遍と特殊の区別は、論理的方法としてみれば、あくまで類と種差との区別、すなわち抽象的普遍と、それとは別の、そしてまたそれには尽くされない性格をもつもの、とのあいだの関係にすぎない。

さらに、「一般国民経済学は哲学的・社会学的性格をもっている。それは、社会の本質と経済生活・経済行為の一般的原因から出発し、類型的な機関・運動やもっとも重要な活動を静態的・動態的に叙述する。それは…1つの全体を体系的・原理的につくりあげようとする」ものである。それは一般から特殊へと進むけれども、その場合の「特殊なものは真理の例証として利用されるにすぎない」。一般国民経済学は、「もっぱら抽象的・理論的な仕方では価値・所得の問題に課題を限定するにつれて、…閉鎖的な形態をとることになる」が、「それが総体としての国民経済的現象を究極的な社会的原因とかかわらせて提示しようとするれば、倫理的・歴史哲学的研究に近づく」（S. 227, 訳17）、というのである。

これに対して、「特殊国民経済学は歴史的であり、実践的・行政法的である」。それは個別国家の発展を時代順に、あるいは個別部門ごとに説明する。「それは具体的なもの、個別的なものから出発し、原因と制度（Einrichtung）の詳細を論議する」。基本的に記述的であり、あらゆる隣接領域や副次的帰結をも対象としなければならない。それは一般的真理に依拠して、原因からの説明と、過去の経緯から未来を推論するが、「最終的結論には、主導的動機として、倫理的・文化的価値観と人間の歴史過程および当該の国家の運命にかんする目的論的世界像が入り込む」（S. 227, 訳18）ものである。

このようにして、一般的国民経済学と特殊国民経済学は相互補完的なものでなければならない。

ここでシュモラーは「特殊」という用語を使用しているが、その意味するところは「個別」であり、1つひとつの国民経済という方が正しいであろう。しかも、ここで彼は、経済学には倫理的価値観と目的論的世界像が入りこむと明言している⁵⁾。

(3) 方法一般の本質

シュモラーによれば、個々の科学の方法は、第1に「根本において統一的であるほかはない、その時代の認識理論と方法論によって規定される」。第2に、研究対象の特殊な性質によって規定される。第3に、方法はその科学の完成度に依存する。したがって、あるときは観察と記述、あるときは分類、またあるときは因果的説明が中心になる、という。

そのうえで、彼は、国民経済学は一連の精神科学と類似あるいは同じ方法を使用する、という。その理由は、同一あるいは類似の材料を利用し、同じ原因から説明しなければならないからである。自然科学的・数学的方法は多くの国民経済的問題に必要な補助手段であり、心理学的方法はすべての精神科学に不可欠である。しかし、あらゆる科学とその方法を習得することは不可能なので、独自の科学にとっての特有の方法に精通することが必要だという。このように、また最初の国民経済に関する定義からみてもわかるように、シュモラーは経済を精神的所産としてとらえ

ているので、経済学の方法は精神科学の方法と共通なのである。⁶⁾

(4) 因果連関の方法と主観的概念構成

シュモラーは、経済学の具体的な個別の方法を詳細に論じている。

まず、われわれの経験は認識の2つの源泉に由来する。1つは動機の知覚とその帰結に関する推論、もう1つは事実の経過と作用を確認し把握することである。これらはいずれも観察とよばれる。自然現象と異なり、精神科学においては、抽象による孤立化的観察は困難である。無限の複雑性や、多数の協働する原因と人間が存在するという条件のもとでは、自然科学のような観察の正確性を望むことは困難である。したがって、多数の観察を総括し、分類し、同一性や相似性、共存性や連続性、結合関係を推論し、確認する。これが記述であって、経済学において記述は独立した固有の地位を獲得するのである。

つぎに、経済学の補助科学として、統計と歴史(学)がある。統計は「体系的な大量観察の方法」である。あいまいな直感に代わって、明確な大きさの観念をもたらす、漠然とした大量現象を確固とした観察のもとに置き、数字による確実な特徴づけを行うことを可能にする。統計結果は時間と空間にしたがって一覧表にされ、作用原因の段階的区分を明らかにする。統計は記述的経済学の主要な道具である。

これに対して、「歴史(学)と歴史的方法」は、人間の発展において伝承されたものを批判、整理し、それを利用して全体の連関を理解可能な全体にするものである。歴史的研究が提供する経験的材料を基礎としてはじめて経済学は前進することができる。さらにまた、国民経済の制度(die Institutionen)とよばれるあらゆる定型的形態と部分的秩序がある。これらは慣習と法によって一定の刻印をうけつつ、永続的に、何百年にわたって同一の仕方で経済生活の経過を支配する(S. 291, 訳97)ものである。

そして「概念構成」がある。シュモラーによれば、「同一のもの、あるいは類似のものから、共通の属性あるいは結論が述語となる集団を形成することによって、すべての概念は現象の著しく大きな外的・内的多様性を単純化する。すべての概念構成(Begriffsbildung)は、同一のものあるいは類似のもの総括によって、現象を分類しようとする試みである」(S. 296, 訳103)。この概念には集合概念、目的概念、関係概念がある。

さらに、言葉と名称を概念に転化することが定義である。定義は言葉の意味についての学問的根拠をもつ判断である。そして、どのような概念構成も分類を含んでいる。さらに、分類には分析的分類と発生的分類がある。

ここまでみる限りで、シュモラーはごく普通のことを述べているように思われるかもしれない。しかし、シュモラーのいう概念構成はあくまで主観的なものであるにすぎない。「概念は、われわれの観念とその秩序づけ(Ordnung)の結果であり、実在するものではないし、独自の自立した本質(Wesen)ではない」。シュモラーによれば、この立場が「今日ではすべての厳密な科学の出発点」をなしている。このように、シュモラーは明確に、科学の対象に内在する概念を否定する。概念はあくまで主観の側にあって、主観によって構成されるものだというのである。

ところで、国民経済学では、先の3つの概念のうち、「主として集合概念・集団概念によって研究が行なわれる」(S. 300, 訳108)。たとえば、「都市経済」などの概念は、このような意味で、

「歴史的にまったく本質的なものを把握しようとする」ものである。

しかし、シュモラーによれば、以上に紹介したような観察、記述、定義、分類は、まだ準備活動である。それによって達成すべきものは、現象の相互関連の認識である。われわれは「現象の必然性を洞察したい」。それは「あらゆる因果的生起の体系を完全に洞察しようとする」（S. 304 訳113）。とはいえ、この洞察が完成することはない。なぜなら、存在するものは複雑に関連しており、説明不可能なものが残存する。繰り返しいたるところで把握することはできないもの・非合理的なものがあるすべての個性的なものは原因から残りなく説明することはできないからである。しかしなお、「認識の理想（Ideal）はわれわれにとっては原因からの説明である」（ibid.）。

条件や原因は1つの総計（eine Summe）として特定の結果をもたらす。確かに、実質的には結果の中に原因が含まれる。しかし、論理的にはそうではなく、「われわれが原因とよぶものは、特定の結果をつくりだすことに無条件で作用する先行状態、1つの現象、1つの出来事だけである」（S. 305、訳114）。

具体的あるいは個別的な方法に関するシュモラーの説明によれば、経済学の方法には2つの特徴がある。第1に、あくまで類、力、法則、因果性という形式的あるいは悟性的認識（抽象的普遍）にとどまる。第2に、そうしたものですら、混沌とした現象を主観の側で秩序づけた結果であって、対象に内在する本質ではない。したがって、認識する主観から自立した実在性は否定され、対象の諸本質を体系づけ、系統立てるような概念的把握ははじめから拒否されている。

（5）メンガーの方法論について

こうした方法論の立場にたつて、シュモラーは、C・メンガーとその後継者たちオーストリア学派の方法を批評している。

シュモラーによれば、「オーストリア学派は…旧古典派経済学がなかば無意識のうちに説明対象とした安定的な経済状態と日常のわずかな振動とを、体系的・意識的に把握し、純粋理論の唯一の対象とした。これによって、彼らは…経済心理学の形成と価値論の多くの部分の発展に貢献した。しかしまた、彼らは理論的国民経済学の対象を著しく狭いものにし、もっとも重要な問題、たとえばあらゆる発展の問題を無視してしまったのである。彼らは、教育に際しても若干の聡明な学生を論理的な訓練によって助けたが、多くの学生からその意欲を奪ってしまった」（S. 263、訳63-64⁷⁾）。

「限界効用理論は、その抽象的公式化によって、数学的訓練を受け、言葉よりも数学的な公式やグラフのほうが説明しやすい国民経済学者にとって新しい根拠地となった」。リカード以降、少数の原因が引き起こす作用に研究を限定する傾向が強まった。「現在でも、経済的利己主義とその結果からのみ出発する市場理論・所得理論が相変わらず追求されているが、しかし、そこではこうした若干の原因からの研究は、人間の同一性、無制限の営業・取引の自由、人口・資本量・技術の絶対的安定性というユートピア的仮定と結びついている。現在の北アメリカの抽象的国民経済学は相変わらずそのような方向に向かっている」、とシュモラーは言う。

このような方法と類似しているのは、原因ではなく、公理・前提・究極的要素、命題から推論するやり方である。メンガーは先験的公理から用語を使って、欲望とその完全な満足への努力を

あげる。しかし、これらはいずれも「因果的判断ではない」。因果的判断だけが唯一、現実の事物にかかわる学問の土台を形成することができるというのがシュモラーの考えである。

最後に、「数学的な国民経済学をつくりだそうとする、ゴッセン、ワルラス、ラウンハルト、ジェヴォンズによる試み」は、公式やグラフを使って単純な前提から数学的形式によって結論を引き出すものである。しかし、「この方法全体は注目に値する新しい成果や真理を提供することはなかった。…作図と公式はすべて現実のなかで決定できない要素・計測できない要素を利用しており、心的原因と計測不可能な市場関係に擬制的な大きさを代入することによって、実際には存在しない精密製の見せかけを引き起こす」（S. 319f, 訳131-2）。

経済学の心理学的基礎を与える試みはいろいろある。オーストリア学派の主観価値論における命題も、限界効用理論全体も高く評価できるけれども、それらは「国民経済学の十分な心理学的基礎ではない。同じように、利己主義とともに公共心・正義感、あるいは（コントの命名による）利他主義を並べてみても、心理学的基礎を創出したことにはならない」（S. 311-312, 訳122）と、シュモラーは言う⁸⁾。

(6) マルクスの方法と社会主義の「科学」について

つぎに、シュモラーが、マルクスおよび当時の社会主義たちによる「科学」的方法について批評している内容を見ておこう。

シュモラーによれば、近代の社会主義者たちの著作には3つの本質的な構成要素がある。(1)心理学、(2)歴史哲学、(3)現存経済秩序の弊害の批判、がそれである。このうち(1)は、マルクスの場合では「形而上学的・歴史的構造を示している」。それはほとんどは素人の域をでないし、「生の真実と幅広い学問的円熟に達していない」。(2)の歴史哲学はより高いレベルにある。マルクス（だけではないが、彼ら）の歴史構成は「才気あふれる試みであり、国家学や歴史学にも本質的な影響を与えた」。「彼らは発展のもっとも重要な因果系列を効果的に抉り出し、政治的、経済的事象を大きな広がりの中で明らかにした。しかしそれは、主観的なものや一面的なものを含み、最終的には…大仕掛けな半空想的構成にほかならない。…そこには事実の十分な歴史的・現実的認識が欠けている。たとえばマルクスの歴史構成は、将来のばくぜんとした理想像から描かれているにもかかわらず、絶対確実な自然科学的必然性のうえに築かれていると自称している」（S. 253, 訳51-52）。

社会主義者たちは近代企業に目を向け、「関連する現象の総体を資本主義という概念に総括し、これに対して改善される未来が社会主義として対置される」。私的所有と自由競争の批判の「かなりの部分は正当である」。そして、「発展の思想が権利を獲得した」。経済過程にとっての法や国家の意義は部分的にのみ認識されたにすぎないが、選挙制度の民主化をつうじた労働者による政権獲得、労働者生産協同組合にたいする国家の助成といった改革は考慮の余地のあるものである。したがって、「社会主義の存在の正当性を否定はできないし、部分的には好ましい影響があることも否定できない。社会的貧困の哲学としての社会主義は、労働者の利益に適合的な学問の方向を代表する」。彼らが「科学的社会主義という名称」をつけたことはたんなるうぬぼれではない。マルクスに「科学的業績が欠けているわけではない。彼（マルクス）は社会主義の統一的・唯物論的体系を創出したのであり、そこでは経済発展が自然的・機械的原因の自然必然的帰

結として把握され、財の生産・分配の経済的・技術的過程がすべての精神的・政治的活動を説明するとされた」（S. 254-255, 訳53）。

しかし、とシュモラーは言う。「もし、マルクスとともに、すべての高度な精神文化、すべての政治的・宗教的活動を経済的・技術的な生産過程の状態から…説明しようとするならば、…これはさまざまな生の領域の間の連関と相互作用を否定することではないとしても、こうした現象の遺漏のない因果的説明の可能性を否定することになる。このような粗雑な唯物論的思想傾向は、すでに J. S. ミルの「論理学」の中で決定的な根拠付けを持って克服された」（S. 319, 訳131）。

この引用文に示されるように、シュモラーは、自分自身の認識方法として因果系列の論理しかもちあわせていないので、その枠組みにあわせてマルクスを解釈し、マルクスがあたかも経済、それも自然的・機械的「原因」や技術的要因からすべてを因果的に説明しているかのように曲解しているのである。機械論的方法というべきはシュモラーの方であろう⁹⁾。

(7) ヴェーバーの方法と価値判断の問題について

さて、最後に、シュモラーによるヴェーバー批判をとりあげよう。

まず、シュモラーは、いまやデイルタイによって、精神科学的方法的・統一的基础づけが遂行され、すべての精神科学にとって新しい段階がはじまった、とする。そして、自分の主著である『一般国民経済学要綱』（1900-1904）の要点を説明する。それによれば、経済行為と経済制度は、「心理学的諸力、さまざまな感情・衝動、倫理的な観念から導きだされるものであり、経済行為は道徳・慣習・法の枠組みの中で心理学的に把握されるものである」（S. 261 訳61¹⁰⁾）。

また、「すべての精神科学において現実を把握することは、同時に価値判断が把握され、それが規定的となることであり、あらゆる行為のなかで最も重要な要因であるこの価値判断がすべての人間生活を支配し、それぞれの共同体およびそれぞれの研究者のなかで、統一的世界観にまでまとめあげられるということを、著者は自覚している」（ibid.）¹¹⁾と述べている。

このような価値概念に結びついたものが、ヴェーバーが提起した「理想型」概念である。しかし、「理想型的概念の本質的機能は、著しく重要な個性的・一回的な現象の測定と、体系的な特徴づけであって、それは類的事象の総括から個別的なものの文化意義を明らかにすべき概念をつくらうとするときに成立する、という（ヴェーバーの）主張には、疑問がないとはいえない」。シュモラーはつぎのようにヴェーバーを批判する。「ヴェーバーは…集合概念の著しく多様な事例を『理想型』という1つの帽子の中に入れてしまい、概念と理想概念とをいっしょくたにしてしまった、と私は主張したい」（S. 301, 訳109）。たとえば「都市経済」という概念をシュモラーとビュッヒャーはつくった。この概念は中世都市経済的現象の「一般的なもの」と典型的なものを把握しようとしたものである。もしヴェーバーがこうした概念はすべて「ユートピア」だるのであれば、「国民経済」も「たんなるユートピア的概念であるべきなのだろうか」、と疑問を呈する。そして、「ヴェーバー自身も、彼の理想型と類概念が、定式化や利用の仕方、あるいは解釈の仕方に応じて相互に移行しあうことを認めている」ではないか、というのである。

シュモラーは、概念が思考の秩序づけのための補助手段であり、現実の完全な模写ではないという点で、まったくヴェーバーに同意する。「歴史的な普遍概念も完全な模写ではないのであり、概念すべてがそもそも模写ではありえない」（S. 301, 訳109）というのがその理由である。また、

概念の分析が科学の第1の主要な課題ではない。科学の対象は現象であるが、その模写や概念ではないとするメンガーの主張は正当だ、とも述べている。科学の対象が複雑になるほど概念は一般的・抽象的になるが、経済学の具体的な概念論議と分類的概念構成は今でも依然として重要である。

以上のように述べたうえで、シュモラーは、「結論」というサブタイトルのついた最後の章において、目的論的考察と倫理的価値判断は経済学の中でどのような位置を占めるべきか、それとも完全に排除されるべきかについて言及する。

シュモラーは言う。たしかに、あらゆる認識の最終目標は実践的なものであり、認識それ自体の進歩も意志の行為であるという事実は承認できるが、厳密な科学は、存在（さらには生成）の(1)正しい観察、(2)定義と分類、(3)原因からの説明、という課題に可能な限り限定することが正しい。近年、あらゆる世界観、あらゆる倫理的判断、あらゆる政治的理想を国民経済学から追放しなければならないという極端な方法の旗手が現れた。それは主にヴェーバーとゾンバルトである¹²⁾。そのヴェーバーに対して強調したいとして、シュモラーはつぎのように言う。

「価値判断はたしかに主観的なものでありうるが、しかし、主観的価値判断とならんで客観的価値判断も存在する。そこには、個々の人間や研究者だけでなく、大きな共同体、国民、時代、さらに全文化世界が関与する」(S. 353, 訳175)のである。

まず、倫理的価値判断は価値判断の一種であり、後者は価値感情というあらゆる精神活動の事象にむすびついたものから成立する。人間の価値感情にもとづく価値判断はより高次なものになっており、秩序だったものになっている。この全体を文化価値とよぶことができる。その中心にあるのは倫理的価値である。したがって、「経済的価値は経済的目的のために追求すべき事物を評価・比較しつつ、正しく等級づける。だが、すべての経済的手段と目的は、より高次の個人的・社会的目的に奉仕し、それを実現する存在でもある。こうして経済以外の領域での生の価値判断が、経済的価値・価格の判断の中に反映される」。「倫理的価値判断は、ある行為が善であると言明する。倫理的なものもつ規範は、社会の中で成立し、規則として把握された善である」(S. 354, 訳176)。

「善」は国民の発展に応じてそれぞれ異なるのは当然である。それぞれの時代にそれぞれの倫理的な善・目的がある。国民階層によっても、また個々人によっても違う。しかし、それは国民・国家・人類をも視野に入れた行為としての「善」である。倫理的価値判断は認識の深化をつうじて歴史的に発展し、成長する。その成熟こそがあらゆる個人的・社会的生活の最高の内実をなしている。だから、時代と国民、宗教や気質が違っていても、基本線においては一致しており、若干の単純な命題を説教するようになる。これがシュモラーの考えるところであった。

国民の教養が高まるに連れて、倫理的価値判断は互いに接近することが可能である。また、倫理的価値判断の歴史的変化においては、偉大の指導者が互いの価値判断を争い、大衆を同意させることによって変革が起こるのであるから、「あらゆる価値判断を排除することは、盲目的な偶然に身をゆだねることを意味する。したがって、価値判断は、生において支配するように、科学においても、改革の議論においても役割をはたさなければならないのである」(S. 356-357, 訳179)。

倫理学はますます経験科学に接近し、倫理的判断は経験的知識と同等である。経済学は、人間の行為とその原因（すなわち社会的・倫理的目的）を、そして経済生活の社会的・倫理的・法的秩

序を問題としなければならない。倫理的な目的と原因を除去しようとしても、正義という問題を考えても、それは入り込んでくる。国民経済のあらゆる問題は倫理的な問題に関係する。

以上のことから出てくる結論は、必要なのはあらゆる理想の排除ではなく、それを扱う際の配慮・客観性・抑制ということである。われわれの専門学科は、たんに技術的・経済的なものだけでなく、経済的な社会制度や、倫理的・法的な問題とも取り組まねばならない。ヴェーバー自身、経済的なものと倫理的なものの密接な関連をうけとめたから、プロテスタンティズムの倫理と資本主義（の精神）に関するすばらしい論文を書いたのではないか、というのがシュモラーによるヴェーバー批判の結びの言葉であった。

2. 行為の理論とポスト・マルクスとしてのヴェーバーの方法

マルクスの死後現われた20世紀最大の社会学者マックス・ヴェーバーは、1895年の教授就任演説において、みずから「ブルジョアジーの一員」と位置づけた。そして、影響力を増していたマルクス主義と対峙しながら、ドイツ国民を代表する階級の一員として、方法論争においてはドイツ歴史学派に対するメンガーの批判に答えようとした。

ヴェーバーは、1917/18年に公表された「価値自由」論文において、前節でとりあげたシュモラーの「主観的価値判断とならんで客観的価値判断も存在する」という言説に激しく反対した。ヴェーバーによれば、そうした言説は実行できないことである。しかし、自分はここで、経験科学が諸個人の主観的評価を客体として取り扱えないと主張しているのではない、と反論している。ヴェーバーは、メンガーによる批判を受け入れながら、ドイツ歴史学派の立場を擁護する。どのようにしてそれが可能か。それとも不可能か。それを評価するには、ヴェーバーの方法論そのものを検討しなければならない。ヴェーバーによる社会科学方法論の特徴を簡単に整理することはこの小論でできることではないが、課題に関連する限りでまとめてみたい。

(1) 個人主義的方法

ヴェーバーにおいては、社会や集団は個人を超えた実体ではない。個人の行為だけが理解可能な現実的なものである。ヴェーバーがその「基礎概念」で述べているところを聞いてみよう。

まず、「われわれにとっては、諸個人だけが、意味ある方向を含む行為の理解可能な主体である」。これがヴェーバーの大前提にある方法論上の考えである。「社会学にとっては、もともと、行為する集合的人格（Kollektivpersönlichkeit）なるものは存在しない」のである。「社会学が、国家、国民、株式会社、家族、軍隊といった類の『構成体（Gebilden）』を問題にする場合は、むしろ、諸個人の現実の社会的行為や、それを行う可能性があるとして観念的に構成された諸個人の社会的行為の特定の経過のことをいっているにすぎない」。「社会組織（soziale Gebilde 国家、協同組合、株式会社、財団）は、諸個人の営む特殊な行為の経過と関連にほかならない」（Weber [1922a] S.10, 訳22-23）。

ヴェーバーによれば、個人は、たとえば権利および義務の主体として、また法律上の重要な行為の実行者として扱われるが、国家などは、現実の人間や専門的思考によって存在し効力をもつ

ものとされている「集合概念 (Kollektivbegriff)」または「観念あるいは表象 (Vorstellungen)」である。人びとはその観念に従って自分たちの行為を従わせているだけであって、そのおかげで「人間の特殊な共同行為のコンプレックスとして存在している」(Ibid., S. 10, 訳24) ののである。

ヴェーバーによれば、これは確かに「個人主義的方法」である。しかし、これを「個人主義的評価などと考えるのはとんでもない誤解」(Ibid., S. 13, 訳29) である。いわゆる有機体的社会学(たとえば、としてシュプレの名があげられているがおそらくシュモラーを念頭においている)は「国民経済」という全体から出発して社会的共同行為を説明し、それからこの全体の内部で個人及びその行動を解釈しようとするが、これに対して、ヴェーバーは、このような機能的な表現方法あるいは概念構成は、誤った概念実在論に陥らなければ、諸個人の動機に基づく解釈のための予備作業として、その意味を認める。このように、ヴェーバーは、シュモラーのいう集合現象と集合観念を認めながら、シュモラーには有機体論の残滓があることを見出す。そして、個人主義的な観念によるアプローチを徹底させる。これがシュモラーとヴェーバーの共通点と相違点である。

(2) 理解社会学

このように、社会を「単一の個人とその行為」へ還元し、そのうえでその行為の主観的「意味 (Sinn)」を理解する。これがヴェーバーのいう「理解社会学」である。社会学とは、「社会的行為を解釈によって理解するという方法で、社会的行為の経過および結果を因果的に説明しようとする科学を指す」(Ibid., S. 3, 訳8)。あるいは、社会学は、歴史学などと同じに、行為を研究する経験科学である。ここでいう「行為」とは、「行為者が主観的な意味を含ませている限りの人間行動を指す」。「社会的という場合は、行為者の考えている意味が他の人びとの行動と関係づけられ、その経過が他人の行動に方向づけられているような行為を指す」(ibid., S. 4, 訳9)。

(3) 類型と理想型概念

ここでいわれるような「意味」はむろん無数にあるだろう。そこで、ヴェーバーは、概念的に構成された純粋類型において、「類型 (Typus, Typen) として考えられた単数または複数の行為者が主観的に考えている意味」(Ibid.) としてこれを理解しようとする。したがって、行為の意味は規範科学がいう意味ではない。

そうした社会的行為の類型には4種類が認められる。目的合理的、価値合理的、感情的そして伝統的がそれであるが、その中でも目的合理的行為に特殊な重要性を求めることはよく知られている。合理的方向をもつ目的的行为はもっとも明確に主観的意味連関を理解できる行為だからである。この純粋な目的合理的行為を観念的に構成し、「理想型」とすることで、現実の非合理的すなわち神秘的、預言者的、宗教的、感情的行為の理解に近づくことができる。ヴェーバーは、「近代経済学 (引用者注: オーストリア学派) における価格理論のことを知り、純粋な目的合理的行為とは、市場に登場する諸個人の行動を一般化したものと考えようになった」(岩波文庫版, 訳者・清水幾太郎の言葉, 101-102¹³⁾。

「社会学は類型概念を構成し、現象の一般的規則を求める」(Ibid., S. 14, 訳31)。「類型的行為すなわち理解可能な行為類型の正しい因果的解釈というのは、類型的と思われる経過が、ある程度まで意味適合的に見えると同時に、ある程度まで因果適合的と認めうる場合である」(ibid., S. 8,

訳20)。「純粹目的合理的行為」は1つの理想型である。これに対するものは非合理的な感情や錯誤にもとづく行為である。「社会学は非合理的（すなわち神秘的、預言者的、宗教的、感情的）諸現象も、理論的な概念すなわち意味適合的な概念によって把握しようとする」（ibid., S. 14, 訳32）という表現は、ヴェーバーの考えをよく表している。

先にみたように、シュモラーもまた、このような類型概念をもちだす。しかし、ヴェーバーとの違いは何かというと、第1に、シュモラーはいわば価値合理性に主に比重を置くのに対して、ヴェーバーは目的合理性に力点をおく。第2に、シュモラーの類型論は集合的あるいは集团的観念にもとづくもので、ヴェーバーの個人主義的方法と相容れない。この2点である。

(4) 分析と総合

こうして、ヴェーバーにおける社会科学の方法は、おのずから定義と分類という分析＝総合的方法にとどまらざるをえないものである。

分析的方法と総合的方法については、ヘーゲルがその「論理学」において、これを悟性的認識あるいは悟性的概念とよんでいる。ヘーゲルによれば、これは「有限な認識作用」である。それは素材に対して外から概念諸規定をもちこみ、そのなかへ素材あるいは対象を取り入れる。その概念の諸規定はあくまで「単に目印の役割をするにすぎない、主観的な認識に役立つためであるにすぎない¹⁴⁾」。

ヴェーバーは、このような悟性的認識方法あるいは分析と総合の方法にもとづいて、経済行為については「財の処分力の平和的行使を主観的かつ第1次的に指向している行為」と定義し、それにもとづいてさまざまに分類を行なう。「経済行為の社会学的基礎範疇」と題された論文の内容は、主要な経済行為の諸概念の分類と相互の関係づけである。したがって、たとえば法則についてみれば、「悪貨が良貨を駆逐する」といったグレシャムの法則のような「法則というものは、ある状況において期待される社会的行為の過程の類型的可能性が観察により立証されたものであり、この可能性は、同時に、行為者の類型的な動機および類型的な主観的意味から理解することができるものである」（Ibid., S. 13, 訳30）ということで、あくまで行為の客観的可能性にすぎないものになる。

ただ、ヴェーバーは、形式的・抽象的普遍あるいは類と種差という思考法の限界をよく自覚していた。しかし、ヴェーバーとしては、ヘーゲル＝マルクスのような弁証法的な普遍概念を採用することはできない。そこで考えられたのが「類型概念」である。しかし、この「類型概念」もやはりヘーゲルの指摘した方法論上の限界や問題点を免れないものである。ヘーゲルによれば、分析と総合は、「それらが本来用いられるべき領域では、本質的な意義をもち、また輝かしい成果を収めている。しかし、それらは哲学的認識に使用できない。…というのは、ここで認識がとる態度は、悟性の態度、形式的同一性に沿って進む態度だからである」（『小論理学』231節）。これは幾何学における定理と証明について述べた箇所の記述であるが、ヘーゲルはいわゆる「概念の構成」についても、つぎのように述べている。「人びとが概念の構成とよんでいるものは、概念を避けて、知覚から拾い上げてきた感覚的諸規定の提示と、それに加えるに、哲学や科学の対象を前提された図式にしたがって図表的に…分類する形式主義とに過ぎない」。さらに、ヘーゲルはつぎのように付け加える。「その際、その背後には、概念と客観性との統一としての理念に関

するおぼろげな表象，および理念は具体的なものであるというおぼろげな表象がひそんでいる」と。

ヴェーバーの提起した理想型については再度，後述するが，その個人主義的で主観的な性格もさることながら，あくまで悟性的認識にとどまる，という問題点をもっている。

(5) 社会関係

このように，主観的意味をもった行為にもとづいて成り立つ一種の社会的関連性がヴェーバーのいう社会関係であった。「基礎概念」論文では，その第3節において，「社会関係 (Soziale Beziehung)」を扱っている。それによれば，社会関係とは，「その意味内容が相互に相手に向かい，それによって方向づけられているような多数者の行動のことを指す。ひとえに，意味の明らかな方法で社会的行為が行なわれる可能性ということだけであって，この可能性が何にもとづくかはさしあたっては問題ではない」(Ibid., S.19, 訳42)とされる。ここでもまた「可能性」であるが，ヴェーバーが「関係」という場合でも，関係は行為に解消される。あるいは，社会関係を客観的に分析し，その概念を実在するものとして把握するというのではなく，行為の背後にある主観的意味から社会関係を類推するにとどまる¹⁵⁾。

以上のようにみてくると，結局，ヴェーバーにおいては，意味，動機，類型，法則，合理性などといっても，すべて同じこと，すなわち個人レベルの主観性を指示しているのではないかとの疑問がわいてくる。結局のところは，観察者によって考えだされた，さまざまな類型としての個人がもつであろう意味観念，目的，動機から，因果連関的にその行為の合理性あるいは非合理性を理解すること，これがヴェーバーにおいては事柄を「説明する」ということにほかならない。

周知のように，ヴェーバーはこうした方法論にもとづいて，さまざまな秩序の正当性（そうした観念や慣例，法，その効力），社会团体（国家や経営体など），闘争（相手の抵抗を排し，自分の意志を貫徹しようという意図に行為が向けられているような社会関係），権力（抵抗を排してでも自分の意志を貫徹するすべての可能性），支配（ある内容の命令を下した場合に特定の人びとの服従が得られる可能性），階級（主として同じ階級状況にある人びとの市場に現われる限りでの経済的区分），身分（生活様式における人びとの区分）といったカテゴリーを明らかにした。これらの内容は一定のリアリティをもっている。マルクスとの比較においては，両者に一定のつながりを認めることもできる。たとえば，階級概念については，渡辺（2004）がそのようなつながりを明らかにしている。ヴェーバー自身も階級を論じる論考において，マルクスの『資本論』の結論が階級で中断されていると書いている（Weber [1922c] S.225, 濱島訳121）。

ヴェーバーは，近代資本主義を自由な労働と資本計算にもとづく合理的な大規模経営ととらえて，それは西欧においてのみみられるとした。そして，こうした資本主義経済における人間関係の「物化」あるいは「非人格的性格」の増大を認め，そこに合理性の必然的な貫徹をみると同時に，近代資本主義における最初の「天職」観念にもとづく合理的で節欲的な労働・生活態度（「資本主義の精神」）が失われてしまったことを明らかにした。

そして，あらゆる社会秩序を転換する原動力は，ヴェーバーの場合，シーザー（＝カエサル）的存在である「カリスマ」にもとめられる。しかし，そのカリスマ的なものもまた日常化していくとされた。そのほかにも，宗教や歴史の研究において，多くの実証主義的な研究成果を残した

ことはよく知られているが、これらの内容に立ち入ることは本稿の課題ではない。

(6) 市民概念

ヘーゲルとマルクスとの対比において、最後にどうしても、ヴェーバーの市民概念と、価値理念あるいは価値判断そしてそれにもとづく経済政策の問題に触れざるをえない。

最初に、ヴェーバーには資本主義あるいは近代資本主義という概念はあるが、市民社会という概念はない。ヴェーバーは、「市民 Bürger (civis Romanus, citizen, bourgeois)」という概念は西洋においてのみあると、1919-1920年にかけて行なった講義録においてのべている。それによれば、市民 (Bürger) には都市と結びついた3つの異なった概念内容がある。1つは、特殊な性質をもつ、ある経済的利害状況の下に置かれている場合、市民は階級という特定の категория において把握されることがありうる。これは経済的意味における市民概念である。しかし、この意味において市民 (ブルジョア) 的階級は統一的なものではない。企業家も手工業者も、大市民も小市民もみな同じに数えられる。2つ目は政治的意味における市民であって、特定の政治的権利の担い手としての属性を有するすべての国家市民 (Staatbürger) を包括するものである。第3は身分的意味であって、官僚とか、プロレタリアートとか、外部から「所有と教養をもつ人びと」とみなされる社会層 (Schichten) の意味である。このように、ヴェーバーは市民という言葉で何か統一的な内容を意味しているわけではない。ただ、彼は、西洋資本主義においては自由に移動する資本が民族国家と結合して「言葉の近代的意味におけるブルジョアジー」としての「国家的市民層 nationale Bürgerstand」が生まれ出たと述べている。ここに彼の価値理念をみいだすことができる。(以上、Weber [1923] S. 270-289, 邦訳, 下巻, 173-213による)。

(7) 価値理念と理想型

次に、この価値理念についてみよう。これについては、先に取り上げた論文のほかに、有名な「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」(Weber [1904])がある。この論文の要旨は簡単に検討できるようなものではないが、これまでの議論との関係で価値理念と政策科学との関係に絞って、簡潔に整理してみたい。

ヴェーバーは、この論文で、社会科学は人間のゲマインシャフト生活とその歴史的形態の社会経済構造がもつ文化的意義を研究するものであり、もっとも広義の「社会政策が解決しようとする同じ問題を歴史的、理論的に扱うのだと述べている。(Weber [1904] S. 165, 訳62-63)。

このような文化現象としての社会現象は、「意味のない、無限の世界の事象」に「人間の立場から意味と意義を与えられた有限の一片」(ibid., S. 180, 訳92)である。その意味と意義はその時代と研究者の「価値理念 (Wertideen)」によって決定される。したがって、文化科学的認識もまた主観によって制約されている。その主観を規定しているものもまた「価値理念」である。その「価値理念」の妥当性を経験にもとづいて証明することはできない。

さらに、歴史的なものは個体的で、無限に変転するものである。したがって、ある「価値理念」から現実を見るにすぎない「科学」の認識は、「思考によって秩序づけられたさまざまな概念と判断」ではあるが、「経験的現実性を模写するもの」(Ibid., S. 213, 訳158)ではない。「現実性を何らかの意味で最終的に編入し、総括するような、1つの完結した概念の体系を構築し、その

うえでそこから現実性をふたたび演繹する」(ibid., S. 184, 訳100) 考え方には意味がない。

そこで、何らかの「価値理念」と、混沌とした多様で、しかも転変する現実性とを、価値理念の側からつなげる認識手段が「理想型 (Idealtypus)」としての理論的概念である。資本主義、市場、都市経済、個人主義、帝国主義、封建制、重商主義、伝統主義、キリスト教などの概念構成はすべてそうした理想型である。こうした理想型概念は、現実に対する価値判断を導くような「価値理念」(したがって何らかの「理想」とは、関連はするけれども、両者は「まったく別物」(Ibid., S. 196-197, 訳125) であって区別しなければならない。しばしばこの2つが混同されるとヴェーバーは注意を促している (ibid., S. 199-200, 訳131-132¹⁶⁾)。

しかし、理想型概念は経験的現実性の中にみいだせるものではない。「理想型は思考上の1構成物 (ein Gedankenbild) である。歴史上の現実性でもないし、本来の現実性であるわけでもない。あるいは現実を見本として自分の中に組み込む図式でもない」(Ibid., S. 194, 訳119)。

この点で、ヴェーバーは、メンガーが提起した個別と普遍との関係についてつぎのようにとらえている。

共通性としての類あるいは普遍概念は認識における不可欠の手段ではあるが、「類と種差という図式による定義は役立たない」。その理由は、文化現象を扱うのは文化概念であり、それらは価値理念と関係があるからで、このような歴史的個体を「発生的概念」において把握するためには、理想型概念による方法しかない。端的に言って、「類的なもの」と「類型的なもの」とは違うのである (以上, Ibid., S. 175-176, 178-190, 194, 201, 訳82-85, 89-91, 120, 134を参照)。

そこから、いわゆる価値自由、あるいは価値判断の科学的取り扱い、さらにいえば価値規範の問題が出てくる。

ヴェーバーによれば、経済学が特定の経済的世界観から価値判断を下さなければならない、というのは「不分明な見方」である。われわれを拘束している「規範や理想」を突きとめ、そこから実践のための処方箋を導き出すことは経験科学の課題ではない。しかし、だからといって、価値判断が科学的討論から排除されねばならないという帰結はでてこない。「問題は、理想や価値判断に関する科学的批判とは何を意味し、何を目的とするのかということ」(Ibid., S. 149, 訳29-30) である。科学ができることは、個々人の意欲や評価、選択、そして行為の意義やそれらの価値規準に関する知識であり、それにもとづいて彼らを反省させることであるが、判断を下すことは各人である、というのがヴェーバーの考えである。したがって、彼は端的に、社会科学は事実を思考によって秩序づけるものだが、社会政策は「理想の提示」(ibid., S. 157, 訳47) であると述べている。われわれを動かす理想はいつの時代でも他の理想との闘争をとおして実現されるほかはないが、それらの理想は互いに同等であることを知らねばならない。これが本論文に託したヴェーバーのメッセージであった。

(8) ヴェーバーによる自然主義的一元論批判

ヴェーバーは、経済学において自然主義的一元論があるために、理論と歴史の混同が生じているとする。彼のいう自然主義的一元論とは、具体的には2つある。1つは、「変わることはない同一の自然法則が経済事象を支配しているという見解」、もう1つは、「一義的な発展法則が経済事象を支配するという見解」である。前の見解はメンガーにおいて、後の見解はシュモラーにお

いて代表されることは明らかである。

前者の見解によれば、「抽象的—理論的方法」は、普遍的な抽象と、法則的連関に照らして経験的なものを分析していけば、あらゆる価値から自由な、という意味で「純粹に客観的な、そしてあらゆる個々の偶然性から解放されているという意味で合理的な」認識に到達できる。経済学の概念のうちにも、何か自然科学に似たようなものがつくられるはずだという偏見が、そこにあるとヴェーバーはいう。

これに対して、後者の見解では、歴史的現実の本来の内容や本質を理論的概念構成の中に固定したと信じられている。概念は実体化され、現象や歴史において実現される。したがって、何か「発展に関する理想型的な概念構成」がなされ、さまざまな類型の系列が法則的必然性をもって発展していくという歴史的順列と一緒にされる。これによって現実の歴史が裁断される。そして、ここには「ヘーゲル流の汎論理主義」の影響があり、ドイツ歴史学派は自然主義的観点を克服していない、とヴェーバーは言う。（以上、[1904] S.148, 185ff, 195, 204, 訳28, 103-106, 122, 139-140.）

ヴェーバーにとって、歴史的個体を発生的概念においてとらえるのは「理想型」という思想像によるしかない。いいかえると、理論と歴史の関係を「正しく解決」する方法はこれしかない。マルクス主義に特有な、法則や発展構成でさえも理想型の性格を備えている（Ibid., S.204, 訳141）、というのがヴェーバーの考えるところであった。

ヴェーバーは、マルクスを「偉大な思想家」とよび、「社会経済的科學」の創始者の1人としてその名をあげているところもある。しかし、物質的利害や経済的原因による歴史の説明はやはり「一元論的傾向」である、とマルクス（主義）を批判する。（Ibid., S.163, 166ff, 204, 訳59, 65-72.）

少なくとも、マルクス自身に対する批判としては、シュモラーのマルクス批判の際に述べたような、ある種の曲解があるが、シュモラーよりはその度合いは小さいように思われる。

（9）ヘーゲル、マルクスそしてヴェーバー

以上、社会科学の方法問題に関するヴェーバーの考えをまとめてみた。

ヘーゲル、そしてマルクスとの関係においてみると、ヴェーバーの方法についてつぎのようなことが言えるだろう。

ヘーゲルが世界の究極にあるとした「絶対理念」には理論的理念と実践的理念が一体化されていた。そのうち、マルクスは前者の理論的理念すなわち理論的概念把握の方法をヘーゲルからうけついで『資本論』（とその草稿）を書いたのに対し、ヴェーバーは人びとの実践的理念がこの世界を作り出しているという考えをうけついだ。ヴェーバーは、この理念のために、「現実にも、そして想像上でも、闘いがなされてきたし、現になされている」、と言う。「理念の歴史的力は社会生活の発展にとってきわめて強大であったし、いまなお強大である」（Ibid., S.150-151, 訳33-34.）。この点では、彼はやはりシュモラーと共通の立場にたっている。しかし、このような社会哲学的課題を避けるのではなく、そうした理念＝理想を批判的に評価することが経験科学のなすべきこと、あるいはなしうることであるというのがヴェーバーの立場である。

シュモラーは、「必要なのはあらゆる理想の排除ではなく、それを扱う際の配慮・客観性・抑制である」としたのだが、ヴェーバーはそのような程度では学問的態度を貫くことはできないと考えた。その場合、客観的あるいは経験的實在をその概念によって理解する方法として、ヴェー

バーは、ヘーゲルではなくカント（Kant, I. 1724-1804）の立場にたつことを鮮明にしている。

「カントにさかのぼる現代認識論の根本思想」は、「概念というものはむしろ、経験的に与えられたものを精神的に支配する目的のための思想上の手段であり、それ以外ではありえないという考え」（Ibid., S. 208, 訳149）にある。これを突き詰めて考えた結果、ヴェーバーは「厳密な発生的概念は必然的に理想型である」（ibid.）という結論に達した。理想型は思想上の因果連関をとらえるための「理想的な思想上の構成物としての性格」をもつものである。これを現実の歴史ととりちがえてはならない。また、経済学を倫理的科学としてはならない。これがヴェーバーによる歴史学派に対する批判（あるいはその学派から生まれたと自負する者の自己批判）であった。

以上のことをふまえ、これからの社会科学と経済学の課題にひきつけて、マルクスとヴェーバーの関係をより積極的に考えてみたい。

3. 21世紀社会科学の課題——関係・制度・行為の関連性

前稿と本稿は、メンガーによる経済学の方法をめぐる問題提起と批判を起点に、メンガーより以前に主要著作や草稿を残したマルクスと、メンガーによる批判の対象となったシュモラー、そして、メンガーの問題をうけとめる立場にたったヴェーバーのそれぞれの方法論を検討してきた。このことをつうじて、第1に言えることは、その思想的、理論的根源はやはりヘーゲル（あるいはさらにカント）にあるということである。つぎに言えることは、マルクスとヴェーバーの接点は人間の社会的行為にある。しかし、両者の分岐点となるのもまたその行為のとらえ方にある、という点である。

マルクスは「ヘーゲルの弟子」を自認しつつ、「実践精神的な」世界の把握とは区別して、思考する頭脳に固有な「理論的方法」によって、実在する人間世界を概念的に把握しようとした。あるいは、これにもとづいて、さまざまな実践精神的な世界の理解の基礎を明らかにし、共産主義思想の科学的基礎を築こうとしたと言える。人びとの社会的、経済的行為はその社会関係を表わすものであり、人びとはその社会関係の担い手とみなされる。したがって、対象的現実は何よりも「実践として、主体的にとらえられ」なければならない。「環境の変革と、人間的活動または自己変革との合致は、変革する実践としてだけつかむことができ、また合理的に理解することができる」。「社会生活は本質的に実践的である」。したがって、理論をまどわす「あらゆる神秘はその合理的解決を人間の実践と、この実践の概念的把握（Begriffen）のうちに見いだす」（以上、マルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」1843年の原文より）。社会的行為の概念的把握は社会諸関係の総和（アンサンブル）を表現するものでなければならない。これがマルクスの理論的方法である。（この段落は拙稿 [2008b] 95-96ページの記述を再掲）

これに対し、ヴェーバーは、人びとの社会的行為がもっている主観的意味から因果連関的に社会現象の意義を「客観的」に明らかにしようとした。したがって、マルクスとの理論的接点は人間の行為にある。しかし、マルクスにおいて、人間の行為は社会関係の表現である。社会的行為の意味あるいは意義は社会関係の概念的理解のうち求められる。これに対して、ヴェーバーの場合は、行為の「客観的」意義はあくまで実践的理念との関連のうち求められる。その意味で

の「価値関係」を表す概念が「理想型」であった。したがって、理想型概念は理論的理念に近くものではあるが、あくまで実践的理念によって導かれたものであるとして概念の实在性は否定されるから、結局のところ観察者の主観によってどのようにも構成されうるものになり、实在の現実やその歴史はいわば「物自体」となって、認識不可能なものになっている。

ただ、ヴェーバーは、社会経済的諸問題の文化的意義を扱ううえで、(1)狭義の経済的事象(2)経済を制約する経済的に重要な事象(3)経済に制約された事象、という3つの内部区分が可能だとした。とくに、第1の狭義の経済事象については、取引所や銀行業務のような「規範や制度」をあげ、これらは「意識的に経済的目的のために創設され、利用される制度」(Weber [1904] S.162, 訳57)であるとしている。そうすると、人びとの社会関係というよりもその文化的意味にもとづく行為は、より具体的には、さまざまな規範や制度となって現れていることを認めている。じっさい、ここでは、『物質的』利害の圧力のもとにある社会関係、制度、集団形成の間接的影響はあらゆる文化領域に広がる」(ibid., S.163, 訳59)と述べている。

また、シュモラーは、主として集合概念による研究によって、国民経済の制度とよばれているさまざまな定型的形態と部分的秩序が経済生活を支配することを明らかにする、としている。

このようにして、われわれは、マルクスとヴェーバーから（そして一部はシュモラーからも）、社会関係—社会的・集団的行為—制度—社会意識、という関連性を導き出すことができる。

20世紀の社会科学と経済学は、ヴェーバー以後、アドルノ（1903-1969）とポパー（1902-1994）による「ドイツ社会科学論争」（1961年）にみられるようなヘーゲル主義的「理念主義」と「実証主義」とに分かれた（この論争については拙著 [2005 a] 第8章を参照）。マルクス主義においては、ルカーチ（1885-1971）がプロレタリアートにおける「階級意識」の形成を問題にし、グラムシ（1891-1937）は「国家になる階級」を問題にした（鈴木富久 [1996]）。これらはいずれも人びとの実践的意識形成に焦点をあてている。他方、実証主義的な流れに属すアメリカのT・パーソンズ（1902-1979、ヴェーバーの著作の英訳者でもある）は、スメルサーとの共著『経済と社会』（1956年）において、経済は社会システムあるいは行為の一般理論の1特殊ケースであり、自身の境界を通じてinputとoutputを交換するものである。経済はつねに非経済的要因により条件づけられ、経済における制度変動の問題は経済理論以外の図式による方法でしか明らかにできない、とした。

さらに、ドイツのルーマン（1927-1998）は、ヘーゲル以来の伝統的な政治経済学と社会学は経済から全体社会を把握してきたのだと批判し、コミュニケーション・システムから構成されている全体社会がいくつかの機能システムに分化する、その1部分が経済システムであって、いわゆるオート・ポイエティック（自己産出的）システムとしては、「貨幣支払い」（これが経済の「それ以上分解できない要素」である）というコミュニケーション行為により体系づけられた特別の機能システムが社会システムにおける「経済」行為である、と論じた（労働から物象へ）。経済システムは「家計と企業」という「参加システム」により市場という（経済）内的「環境」と自己を区分する。もはや資本と労働という図式は時代遅れの儀礼的表現だが、これに代わるものはないとする（『社会の経済』1988年より）。

そして、このルーマンとのあいだでシステム論争（1971年）を展開したJ・ハーバマス（1929-）は、有名な「コミュニケーション的行為の理論」（1981年）の課題をヴェーバーの目的論的な合理的行為から、相互了解志向的行為における合理性への転換におき、生活世界という「前提とされ

ている共通の背景知」の解明と、システム理論と行為理論との統合をめざしてきた。

本稿は、このような20世紀社会科学の諸潮流を総括することを課題としたものではない。マルクスとヴェーバーの方法についても、これを全面的に検討したとは言えない。メンガーの問題提起と批判に、マルクスであればどのように答えただろうか、また、ヴェーバーは実際にどのように答えたか、そしてメンガーとヴェーバーの両方から批判の対象とされたシュモラーの方法はどのようなものであったかを検討してきたにすぎない。また、マルクスとヴェーバーとの関係について、これまでどのような議論がなされてきたかを検討することもできていないが、日本の社会科学における両者の受容と変容を考えることは不可欠な課題であると考えている。

しかし、少なくとも、経済学（社会経済学）の範囲において、つぎのことは言えるのではないかと考える。

まず、マルクスの生産関係論を出発点にすることができる。彼の『資本論』は、(1)生産関係の物象化論（人びとの生産関係が非人格的な経済事象ないし事柄として現れることを概念として把握したもの）(2)矛盾論（生産力と生産関係の発展によって生じる経済的諸矛盾の概念的展開）(3)人間発達論（すなわち人間の本性はその発達を疎外＝阻害するものを通じて発達するという理念を客観的に基礎づける理論）の3つを、資本概念の生成と展開という方法にそって三位一体的に叙述したものである。しかし、競争（＝すなわち市場および市場外での相互行為、したがって対立や闘争を含む）は諸法則の実現の世界として捨象され、『資本論』の範囲外とされた。また、諸制度は前提されており、貨幣制度、工場法、信用制度等が『資本論』では扱われているが、生産関係が制度化する論理は不分明である（角田 [1996] はこの論理を解明する手がかりとして「集合行為」と「費用節約」をとりだした）。

マルクス以後の経済学という意味で、ポスト・マルクス経済学という用語を使えば、20世紀前半、アメリカでは制度派経済学（ヴェブレン、コモンズなど）の制度主義が、新古典派経済学の個人的・利己的行為を批判し、集合行為におけるルール（思考、習慣、規範その他）の制度化を探索した。ドイツ歴史学派と呼応する制度主義の流れとその意味合いからすれば、制度の生成論には生産関係を軸とする社会関係からの理論展開が必要である。そして、現在、アメリカ・ラディカル派経済学はマルクスと制度学派そしてケインズ経済学を受け継ぎ、資本蓄積が行われる制度的環境を社会的蓄積構造（SSA）と名づけ、1990年代以降を「グローバル資本主義」段階として、三次元社会経済学とその理論進化（深化）の方向を示している。その際、彼らは、社会経済学における価値（評価基準）を効率・公正・民主主義におくべきだとする（Bowles, et al. [2005]）。また、積極的な資産再配分と効率的市場のための新たなルールづくりを提起している（Wright [ed.1998]¹⁷）。

さらに、J・M・ケインズは1936年に『雇用、利子および貨幣の一般理論』を著したのだが、近年の伊東光晴著『現代に生きるケインズ—モラルサイエンスとしての経済理論』（岩波新書、2006年5月）によれば、『一般理論』をそれ以前の新古典派経済学と分かち5つの前提がある。(1)多元的理論(2)統計的検証可能な理論(3)不確実性の前提(4)合成の誤謬の発見(5)方法論的個人主義の否定、がそれである。これらは、(1)の多元性をどのように理解するかを別にすれば、マルクスを継承するポスト・マルクスの社会経済学においても受け入れることができる前提であろう。

現代経済学の源流がマルクス、新古典派、制度学派（ドイツ歴史学派に近い）、そしてケインズの4つにあるという仮説にもとづき、ポスト・マルクス経済学は、ヴェーバーや新古典派経済学

の個人主義的な行為アプローチを批判しながらも、特殊歴史的な社会関係と社会制度によって制約された社会的・集団的、そして個人的な経済行為を解明する理論を発展させる必要がある。これが21世紀の社会科学および経済学が前世紀から引き継ぐべき、そして前世紀から課せられている課題ではないだろうか。

注

- 1) 本稿は通常の経済学史あるいは経済（政策）思想史研究とは異なって、いわば世代を異にするが、それぞれの学派を代表する人物の著作をもとに、それぞれの社会科学と経済学の方法論を比較してみようというものである。したがって、それぞれに存在した、さまざまな事情、関係、そして四者の経済理論あるいは社会学の内容についてはここではとりあげない。
- 2) Schmoller [1911]。なお、同辞典の第4版1928年（A・ヴェーバー、F・ヴィーザー、L・エルスター編集、第5巻）では、本項目にあたる“Volkswirtschaft und Volkswirtschaftslehre”は別の著者（A. Voigt）になっている。
- 3) 田村信一 [1993]（とくに終章）、住谷・八木編 [1998]、八木編 [2006] および、シュモラー後掲書の訳者（田村）「解題」などを参照。
- 4) シュモラーによるヘーゲル評価はまとまった形で書かれていない。たとえば、「ヘーゲル弁証法は、ベーコンが要求した経験的観察の適用がほぼすべての科学に影響を及ぼしたのと同様に、国家科学および国民経済学にまで広がっている」（S. 229, 訳20）という記述がみられる。
また、ドイツ歴史学派が影響を受けたもののなかの1つとして、「自然法と自由主義にたいする（ハラー、アダム・ミュラー、ヘーゲルの）ロマン主義的・哲学的反動」（S. 258, 訳57）として、ヘーゲルの名をあげている箇所がある。
さらに、19世紀前半の精神科学とくに歴史叙述は、フンボルトとヘーゲルの影響にあつて、超越的観念論という形態の理想主義的形而上学の支配下にあつたが、19世紀後半になって、絶対的な価値や規範といった観点からの把握は拒否された、とも述べられている（S. 346, 訳168）。
- 5) シュモラー [1911] 第5章「道德体系」によれば、人びとは世界を目的と価値判断から理解し、原因から説明する指図を求めようになる。その結果として、道德体系は「社会的人間にかんする科学の本来の最初の試みである」として、経済学の生成における道德科学の役割をのべている。シュモラーによれば、良き意志である当為が動く方向についての観念あるいは究極の理想が理念である。しかし、これらは抽象的な目標であつて、1つだけに注目すればかならず濫用や誇張をもたらす。自由、平等、正義などを厳密な論理で正しい行為をそこから導くことができるような最高原理だと考える人びとは、こうした倫理的命題の本性を見誤っているのだと批判する。
- 6) シュモラーはこの後で、「国民経済学の成立と現在の姿」を論じている（[1911] 第6章以下第11章）。現在の時点からみても、自然法思想、重商主義、古典派経済学、英米系の経済学に対する評価は非常に興味深い内容であるが、本稿の課題のためには省略せざるをえない。シュモラーは「経済科学の領域において主導権をとったのはドイツ歴史学派である」と自負すると同時に、リカードが経済学を「価値・価格・所得分配の理論に圧縮し」、「1つの演繹科学をつくりだし」てしまい、それを受け継ぐ経済学者たちがじつは「自分たちの理論が一面的な階級支配のための学問になってしまったことに気づかなかつた」と指摘していることを付記しておこう。
- 7) シュモラーはこれに続けて、「才気あふれた繊細な青年シュムペーター」の『理論経済学の本質と主要内容』（1908年）について触れて、つぎのように述べている。
「彼（シュムペーター）が研究しようとしたのは、人間とその行為ではなく、財の価値関係である。だが、財と財の世界は、人間とその行為・その価値判断をつうじてのみ関係づけられることを、彼は見過ごしている」。「彼は特定の狭い領域に対するこの方法の部分的妥当性と同時に、こうした方法の弱点をも提示した、と私は言いたい」（S. 264, 訳65）。後にシュムペーターがシュモラーを高く評価

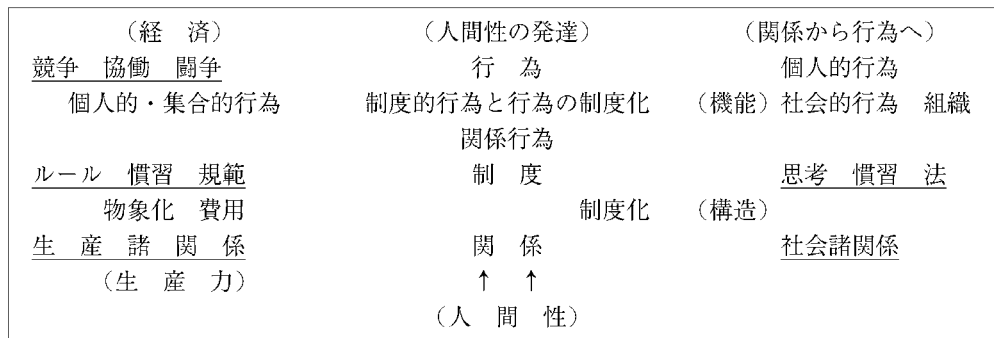
したと重ね合わせると、この批評はたいへん興味深い。

この点では、シュムペーターの方法論的道具主義にもとづくシュモラー評価と、シュモラーの歴史的・倫理的接近の現代的意義、その進化論的経済学について論じた塩野谷祐一 [1988] [1990] が興味深い論稿である。

- 8) オーストリア学派の狭さを指摘しつつ、シュモラーはマーシャルを高く評価する。マーシャルは限界効用理論の有益な部分を受容したが、それに没頭することなく、社会主義や歴史研究にも通じている。シュモラーに言わせれば、マーシャルは倫理的な感情に満たされているので、利己心からのみ出発することを理解できない。1890年の『原理』第1巻の後半部分は「近年の科学の成果のうちで最良のものであると私は考えている」(S.267, 訳69)。
- 9) シュモラーのマルクス理解にはかなり曲解がある。たとえば、シュモラーは、マルクスが人間の行為を脳の機能とダーウィン思想から説明することで経済的・社会的秩序を把握したと考えた、と述べているし、「経済の中心としてのリカードの価値思想から人類の社会史を展開したいという希望は、ダーウィンにならって種の分化の中に剰余価値の自然的土台を認識するに至った」とか述べているが、マルクスのどこを読めばそのような評価がでてくるのだろうか。
- 10) シュモラーは、心理学的分析のさまざまな手がかりを通じて、将来は大きく展開するだろう、という見通しを述べている。その手がかりとして、営利衝動とその他の衝動の研究、社会における心的事象、感情や観念や行為目的の一致の形成、「精神的集合力」を出現させる手段の影響などの研究から、社会の集合現象の理解をもたらし、さまざまな制度が出現する、と述べている。したがって、研究が個別(人)から出発するのか、集合(団)現象から出発するのかという問題の設定そのものが誤ったものである。シュモラーによれば、人間は合成された全体である(Der Mensch ist ein zusammengesetztes Ganzes)。個別事例は人間の集団の現われであるし、無限に分割可能な個別事例を分離し、思考のプロセスをつうじて1つの全体としてみなしたものが個別事例である。
このように、集合概念を認め、そこに経済制度を位置づける方法はアメリカ制度学派と共通するところがあって、シュモラーは道徳、慣習、法などのノルムが文化の基礎条件とみなした。このような方法がヴェーバーによる批判、(というより)拒否を招いたと言えるだろう。
- 11) シュモラーの著『一般国民経済学要綱』については田村 [1993] 第7章が詳しい。
- 12) ここでシュモラーはヴェーバーを価値判断排除論者に仕立てている。邦訳書174ページ(ナウ編の論文集S.352)におけるヴェーバーの「客観性」論文からの引用は、ヴェーバーの本来の主張とは逆の意味になっている、と訳者解題で述べられているところである(田村訳270ページ)。
- 13) ヴェーバーにおけるメンガー理論の受容については、八木 [1988] 第1章「マックス・ヴェーバーにとつてのメンガー」においてとりあげられている。
- 14) ヘーゲル『小論理学』226-230節、同『大論理学』概念論第3篇第2章A、を参照。
ついでにいえば、ヴェーバーは、「ロッシヤーの歴史的方法」という論文(1903-1906年にかけて書かれた一連の論文の最初のもの)において、ヘーゲルは個別的事象や事物を形而上学的実在としての普遍概念の実現として包括し、そこから流出させるとして、これを「流出論的把握」とよんでいる。他方、ロッシヤーについては、ヘーゲルの弁証法的普遍概念と類としての普遍概念とを区別できなかったし、マルクス『資本論』が代表しているようなヘーゲル弁証法についての批判を試みようとしなかった、そして本質的には概念と概念把握されるものとのあいだの関係という論理的問題の方法的意義をヘーゲルほどには認識しなかった、と厳しく批判している。
- 15) Weber [1913] によれば、ゲマインシャフト的行為すなわち「その主観において意味をもって他の人びとの行動と関係づけられている行為」が第1次的なものである。これに対して、ゲマインシャフト的行為が、ある秩序にもとづく期待をもってなされ、その秩序の制定が純粹に目的合理的に行なわれ、意味をもつ方向づけが主観において目的合理的になされる限りにおいて、ゲゼルシャフト的行為という。この点はかならずしも Weber [1922] においては明確ではなく、「社会関係」という用語が使われているが、ゲゼルシャフト的行為はある種の制度化された関係行為のことであると思われる。

- 16) Idealtypus には現在、「理想型」という訳語が多く使われている。これは「価値理念 Idee」との関係が強出すぎるきらいがある。ヴェーバーは、両者はまったく別物だということも強調しているので、「理想型」と訳した。この場合の「理想」は何らかの「価値理念」にとっての理想ではなく、思考の概念構成にとって理想的だ、という意味である。
- 17) 牧野広義氏は、唯物論の立場から、価値を積極的に次のように規定し、価値意識の諸形態および人権、普遍的・共同的価値を論じている。「価値とは、人間の生存や生活の充足や人間の自己実現にとっての、自然や社会の事物の必要性、有用性であり、また人間の行為の目的や手段としての意味をもち、さらに人間の行為の規範や理想となるもの、である」（牧野 [1998] 197）。さらに、本稿に関連するものとして、ハーバーマスについての興味深い議論がある。（牧野 [2007] 第5章）

図1 仮説的図解



参考文献

関連文献一覧（拙稿 [2008b] と重なるものがある。訳文はかならずしも邦訳の通りではない）

Bowles, Samuel, Richard Edwards, Franklin Roosevelt (2005) *Understanding Capitalism, Competition, Command, and Change*, 3rd., N. Y..

Hegel, G. W. F. (1816) *Wissenschaft der Logik*, II, *Werke*, Bd.6, Suhrkamp, 1969. 武市健人訳『大論理学』下巻, 岩波書店, 1961年, 寺沢恒信訳, 第3巻, 以文社, 1999年。

Hegel, G. W. F. (1830) *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*, Erster Theil, *Die Wissenschaft der Logik Mit den mündlichen Zusätzen*, *Werke*, Bd.8, Suhrkamp, 1970. 松村一人訳『小論理学』岩波文庫版, 上, 下, 1951-52年。

Marx, Karl (1857) *Einleitung, Ökonomische Manuscripte 1857/1858*, *Marx Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Zweite Abteilung, Bd.1, Teil 1, Berlin, 1976. 『マルクス資本論草稿集1』大月書店, 1981年。

Marx, Karl (1859) *Vorwort in Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Erstes Heft, *Marx Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Zweite Abteilung, Bd.2, Berlin, 1980. 『マルクス資本論草稿集3』大月書店, 1984年。

Marx, Karl (1861-1863) *Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuscript 1861-1863)* *Marx Engels Gesamtausgabe (MEGA)* Zweite Abteilung, Bd.3, Teil 4, Berlin, 1979. 『マルクス資本論草稿集7』大月書店, 1982年。

Marx, Karl, *Das Kapital*, Bd.1-3, in *Marx-Engels Werke*, Bd.23-25, Berlin. 『資本論』『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店, 全5冊, 1965-1967年。現行第2部, 第3部はエンゲルス編集版である。

Marx, Karl, *Ökonomische Manuscripte (1863-1867)*, *Marx Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, II, Bd.4, Teil2, Berlin, 1992.

Menger, Carl (1883) *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politischen Oekonomie*, *Carl Menger Gesammelte Werke*, Bd. II, J. C. B. Mohr, Tübingen 1969. 福井孝

治・吉田昇三訳、吉田改訳『経済学の方法』日本経済評論社、1986年。この改訳版には、関連するシュモラーの「批評」論文「国家科学・社会科学の方法論のために」の抄訳と、メンガーの1884年の論文「ドイツ国民経済学における歴史主義の誤謬」の邦訳が収録されている。

Schmoller, Gustav von (1991) *Volkswirtschaft, Volkswirtschaftslehre und - methode*, in Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Dritte Aufgabe, Achter Band, Jena, S. 426-501. 田村信一訳『国民経済, 国民経済学および方法』日本経済評論社、1999年。原書である同辞典にあたることができなかつたので、論文集 Gustav Schmoller, *Historisch-ethische Nationalökonomie als kulturwissenschaft*, Ausgewählte methodologische Schriften, Hrsg. von Heino Heinrich Nau, Marburg, 1998. を参照し、訳は基本的に田村訳に従ったが、訳語をすこし変えているところがある。田村信一氏の訳者解題によれば、ナウ編の同論文集は誤植がひどく、利用には注意が必要だということである。また同書には、シュモラーによるメンガーとディルタイ「批評」の全文と、ベルリン大学総長就任講演とが訳出されている。

Weber, Max (1895) *Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik, Akademische Antrittsrede, Freiburg und Leipzig, in Gesammelte Politische Schriften*, Dritte Auflage, herausgegeben von J. Winckelmann, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1958, S. 1-25. 田中真晴訳『国民国家と経済政策』未来社、1959年、同新版、2000年、『世界の大思想3 ウェーバー』河出書房新社、1973年、所収。

Weber, Max (1903-1906) *Roscher und Knies, und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Sechste Auflage herausgegeben von J. Winckelmann, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1985, S. 1-145. 松井秀親訳『ロッシヤーとクニース』未来社、1988年。

Weber, Max (1904) *Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Sechste Auflage, herausgegeben von J. Winckelmann, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1985, S. 146-214. 富永祐治・立野安男訳、折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫版、1998年、徳永恂訳『現代社会学体系5』青木書店、1971年、出口勇蔵訳『世界の大思想3』河出書房新社、1973年、祇園寺信彦・祇園寺則夫訳『社会科学の方法』講談社文庫版、1994年。本文の引用では原書ページと岩波文庫版のページとをかかげる。

Weber, Max (1913) *Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie, in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Sechste Auflage, herausgegeben von J. Winckelmann, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1985, S. 427-474. 『理解社会学のカテゴリー』林道義訳、岩波文庫版、1968年、海老原・中野訳、未来社、1990年。

Weber, Max (1917/18) *Der Sinn der »Wertfreiheit« der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften, in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Sechste Auflage, herausgegeben von J. Winckelmann, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1985, S. 489-540. 松代和郎訳『社会学および経済学の「価値自由」の意味』創文社、1976年、木本幸造監訳『社会学・経済学における「価値自由」の意味』日本評論社、改訂版、1979年、中村貞二訳、『完訳 世界の大思想1 ウェーバー 社会科学論集』河出書房新社、1982年、所収。

Weber, Max (1922a) *Soziologische Grundbegriffe, Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehenden Soziologie*, Studierenden herausgegeben von J. Winckelmann, Köln/Berlin, Kiepenheuer & Witsch, 1964, Erster Teil, Erstes Kapitel, Erster Halbband, S. 1-42. ヴェーバー死後、編纂、出版された『経済と社会』第1章。清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波文庫版、1972年。濱島朗訳『社会学の基礎概念』『現代社会学体系5 ウェーバー—方法・宗教・政治—』青木書店、1971年、所収。本文では「基礎概念」と略し、原書ページと岩波文庫版のページ数のみを記す。現在のヴェーバー研究ではこの「経済と社会」の編纂が疑問視され、少なくとも著作全体を1つのものとみることはできないとされている。

- Weber, Max (1922b) *Soziologische Grundkategorien des Wirtschaftens, Wirtschaft und Gesellschaft*, 1964, Zweites Kapitel, Erster Halbband, 1964, S. 43-155. 同上, 第2章。富永健一訳「経済行為の社会学的基礎範疇」『世界の名著50 ウェーバー』中央公論社, 1975年, 所収。
- Weber, Max (1922c) *Die Typen der Herrschaft, Wirtschaft und Gesellschaft*, 1964, Drittes Kapitel, Erster Halbband, S. 157-227. 同上, 第3章。濱島朗訳『権力と支配』有斐閣, 1967年(原書第3版の訳)。
- Weber, Max (1923) *Wirtschaftsgeschichte, Abriss der universalen Sozial- und Wirtschafts-geschichte, aus den nachgelassenen vorlesungen von S. Hellman und M. Palyi, München und Leipzig*. 黒正巖・青山秀夫訳『一般社会経済史要論』上, 下巻, 岩波書店, 1954-1955年(原書第2版の訳)。
- Wright, Erik Olin(ed.) [1998] Samuel Bowles and Herbert Gintis, *Recasting Egalitarianism: New Rules for Communities, States and Markets*, Verso. 遠山弘徳訳『平等主義の政治経済学』大村書店, 2002年。
- ヘーゲル論理学研究会編(1979)『見田石介ヘーゲル大論理学研究』(全3巻)大月書店。
- 生松敬三(1969)『社会思想の歴史—ヘーゲル・マルクス・ヴェーバー』岩波現代文庫, 2002年。
- 伊東光晴(2006)『現代に生きるケインズ—モラルサイエンスとしての経済理論』岩波新書。
- 角田修一(1977)「書評『見田石介著作集第1巻 ヘーゲル論理学と社会科学(大月書店)』」『立命館経済学』第26巻第2号, 1977年。
- 角田修一(1992)『生活様式の経済学』青木書店。
- 角田修一(1996)「制度・組織論の生産関係アプローチ—現代経済学批判とマルクス」『唯物論と現代』第18号, 1996年11月。
- 角田修一(2005a)『「資本」の方法とヘーゲル論理学』大月書店。
- 角田修一(2005b)「市場経済の生産関係アプローチ—価値論のコンフィギュレーション—」『立命館経済学』第54巻第4号, 2005年11月。
- 角田修一(2007)「分析的方法を基礎とする弁証法—ヘーゲル, マルクス, 見田石介」関西唯物論研究会『唯物論と現代』第39号, 2007年5月。
- 角田修一(2008a)「近代市民社会批判の学としてのヘーゲルとマルクス」『立命館文学』第603号(向井俊彦先生追悼記念論集), 2008年2月。
- 角田修一(2008b)「マルクスとメンガーにおける方法の差異」関西唯物論研究会『唯物論と現代』第40号, 2008年3月。
- 小林一穂・大関雅弘・鈴木富久・伊藤勇・竹内真澄(1996)『人間再生の社会理論』創風社。
- 牧野広義(1998)『現代唯物論の探求 理論と実践と価値』文理閣。
- 牧野広義(2007)『現代倫理と民主主義』地歴社。
- 見田石介(1976)『見田石介著作集』全6巻, 補巻1, 大月書店, 1976-1977年。
- 塩野谷祐一(1988)「シュンペーター・シュモラー・ウェーバー—歴史認識の方法論—」『一橋論叢』第100巻第6号, 1988年12月。
- 塩野谷祐一(1990)「グスタフ・フォン・シュモラー—ドイツ歴史派経済学の現代性—」『一橋論叢』第103巻第4号, 1990年4月。
- 住谷一彦・八木紀一郎編(1998)『歴史学派の世界』日本経済評論社。
- 田村信一(1993)『グスタフ・シュモラー研究』御茶の水書房。
- 八木紀一郎(1988)『オーストリア経済思想史研究—中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会, とくに第1章「マックス・ヴェーバーにとってのメンガー」。
- 八木紀一郎編(2006)『経済思想のドイツの伝統 経済思想7』日本経済評論社。
- 吉田浩(2005)『ウェーバーとヘーゲル, マルクス』文理閣。
- 渡辺雅男(2004)『階級』彩流社。

The differences between Gustav Schmoller and Max Weber in the methodology of social science and political economy — from the standpoint of Hegel and Marx —

Shuichi KAKUTA

The author (S. Kakuta) published *The Method of "Capital" and Hegel's Logic* (in Japanese, Otsuki-shoten, Tokyo, 2005). The book has three parts. Part 1 is entitled Hegel's *Logic* and the method of Marx's *Capital*. Part 2 is entitled The study of "*Grundrisse*" (in German expression of the manuscripts for the political economy 1857-58 of Marx). Part 3 is entitled For Marx as a modern theory of political economy.

The methodological background (or source) in modern social sciences and the critics of political economy (including "economics") must be searched for the understanding of the relationship between Hegel's philosophy and the methodology of Marx. The book explains the "rational core" in Hegel's *Logic* and explores why Marx could adopt the core. We can find the key to the method in Marx's manuscripts for the criticism for political economy 1857-58. Japanese Hegelian philosopher Sekisuke Mita (1906-75) expressed the core as the dialectic laid by the analytical method.

The book finds the trinity form in the method of the political economy in Marx, especially in more concrete contents in Marx's *Capital* and *Grundrisse*. First, the reification of the production relationships among people (die Personen) in the capitalist society, second, the economic contradictions between productive power and the relationships which appear in several forms, and third is the potential possibilities of human development in the capitalist society. These three points form the trinity. The themes have the relationships each other.

Within the Marxian tradition in Japan and former Soviet Union these themes were misunderstood and neglected. The main cause is the misunderstanding of the relationship between Marx's methodology and the heritage of Hegel's *Logic*.

However Marx died in 1883. His thinking stopped at that time. After his death several manuscripts of Marx were found and published. We have to understand the limitation of his theory the same as the abundant contents of it. As is well, Marx planned out critical works for the system of political economy composed of six parts. But he wrote only the first part, moreover the first item in it, that is Marx's *Capital* composed of three volumes. Why did he do so? The reason is that he thought *Capital in general* (the methodological term) was the universal in dialectic meaning.

After the publication of *The Method of "Capital" and Hegel's Logic*, two papers were published. *Hegel and Marx as critical theories of modern civil society* (*Ritsumeikan Bungaku* No. 603, Feb.2008), and *The differences between Marx and Carl Menger in their methodology* (*Yuibutsuron to Gendai, Materialism and Today* edited by Kansai Yuibutsuron Ken-

kyukai No. 40, March 2008. The latter paper argues that there are four big problems in Menger's criticism of the German historical school (1883), and if Marx could recognize them what he would reply them. Carl Menger (1840-1921) was the founder of the Austrian school of economics. In his argument history is separated from theory, universal is separated from individual and peculiar, theory and human action or ethics in it, and his atomism rejected the holistic or organism idea.

This paper is a sequel to the former one. In the paper the differences between the representative of German historical school, Gustav von Schmoller (1838-1917), and the inside critics of the school, Max Weber (1864-1920), in their methodology are clarified critically. To say critically means from the standpoint of Hegel and Marx. But the points at issue are the main problems in the method of modern social sciences and political economy.

The German historical school tended to find the peculiarity of German national economy by the thought that it was the result of the folk spirit. This form of reasoning was influenced by the German Idealism. Its representative G. W. Hegel identified the theoretical idea ("trueness") and practical idea ("will" or "goodness") in the system of philosophy. While Marx adopted the former theoretical method, he rejected the latter spiritual one. The German historical school adopted the practical ideal of Hegel's thought, that is, the practical mind creates the objective world. But they were so strongly founded on new-Kantian philosophy, they thought the world could be clarified by the subjective human mind.

M. Weber criticised for the vagueness of the German historical school, especially its relationship between concept and reality. He rejected the concepts of collective subjects like nation, state, and social organizations. It is very famous that Weber presented the notion of Ideal type (Ideal typus in German). Weber's well known notion of Ideal type was the bridge between the concept and reality. The bridge was constructed from human knowledge or several meanings of the actor. The concepts do not exist in the real world, they are the subjective construction to the end for Max Weber, due to his belief, that is, the Society is the special process of individual actions and its complex of subjective meaning.

Lastly, we can find the point of contact between K. Marx and M. Weber, G. v. Schmoller. The point is "social institutions". Marx thought human actions are the representation of their relationships. So that social institutions, like laws, corporations, and others, are the products of human actions, but these must be explained by the realistic concepts of social relationships. Weber thought otherwise. In his point of view social institutions must have several meanings in personal actions. These phenomena could be explained by diverse meanings by the standpoints of observers. The several meanings are consciously institutionalized to the institutions of the society.

As a result, we can find the connection between the social relationships (productive relationships in Marx's word), social institutions (norms, social consciousness) and collective actions. Individual action is strongly limited by social relationships and institutions. Then this is the problem which we need to clarify the logic of these connections.